

# 介護職員自己評価表

2026年3月31日

事業所名	特別養護老人ホーム たにやまの里
------	------------------

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	2人	
介護福祉士	16人	
理学療法士	1人	
作業療法士	1人	
実務者研修修了者その他	7人	
看護師・准看護師	2人	

※複数資格者含む

## ◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よくできている	なんとかできている	あまりできていない	ほとんどできていない	備考
前回の課題に関する改善	14.3%	31.8%	39.0%	14.9%	

前回の改善計画
広域型特養として、入居者が穏やかに日常生活を送れる環境の実現を目的として、①孤独を感じさせないケア、②生活リズムを踏まえたケア、③心身の健康維持を目指すケア、④家族が参加できるケア、⑤AI解析を活用した専門的ケアの充実を図っている。認知症ケアにおいては、作業中であっても積極的に会話を行うこと、回想療法等の心理療法の活用、残存機能を生かした生活リハビリの提供を計画的に実施した。過去の記憶を語る行為自体に一定の効果が認められることから、日常的な「声掛け」や短い会話を重視した支援を継続している。一方、ケアの質はスタッフの経験や技能により差異が生じるため、支援の一貫性を確保する観点から、社内外研修を通じたスキル向上を推進し、ネガティブな感情を誘発しないケア体制の整備に努めた。
前回の改善計画に対する取組み結果
「ひと」の存在を感じられる関わりを重視し、入居者が孤独を感じず生活感のある日常を送れる環境づくりを推進した。結果、生活リズムは概ね整い、昼夜逆転等の睡眠障害は減少した。一方、各フロアにおいて昼間に眠気がみられず夜間に覚醒が続く入居者が確認されたため、入眠時間の調整や日中活動量の増加を図るなど、体内時計の調整を目的とした個別支援を実施した。これらにより、生活リズムは全体として改善傾向にある。また、理学療法士・作業療法士による機能訓練が提供されているものの、集団活動の支援に苦手意識を有するスタッフもみられ、OJTによる技能向上が必要であることが明らかとなった。

## ◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よくできている(60以上)	なんとかできている(50~59)	あまりできていない(40~49)	ほとんどできていない(39以下)	合計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	14.3%	35.7%	28.6%	21.4%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	14.3%	35.7%	50.0%	0.0%	100%
SECTION 3	食事について	14.3%	28.6%	42.9%	14.3%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	14.3%	28.6%	35.7%	21.4%	100%
SECTION 5	排泄について	14.3%	35.7%	28.6%	21.4%	100%
SECTION 6	入浴について	14.3%	35.7%	28.6%	21.4%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	14.3%	28.6%	35.7%	21.4%	100%
SECTION 8	服薬について	14.3%	42.9%	21.4%	21.4%	100%
SECTION 9	意思疎通について	14.3%	21.4%	57.1%	7.1%	100%
SECTION 10	行動障害について	14.3%	35.7%	42.9%	7.1%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	14.3%	21.4%	57.1%	7.1%	100%

自己評価及び改善が必要な事項
本事業所では、「ちょっとした声掛けや会話」に加え、近くに「ひと」の存在を感じられる関わりを重視し、入居者が孤独感を抱かず生活感のある日常を送れる環境づくりを推進した。その結果、入居者の生活リズムは概ね整い、昼夜逆転を含む睡眠障害の発生は減少傾向を示した。一方で、各フロアにおいて昼間に眠気を示さず、夜間に覚醒が続く入居者が一定数確認されたため、入眠時間の調整や日中活動量の増加を図るなど、体内時計の調整を目的とした個別支援を実施した。これらの取り組みにより、生活リズムは全体として改善傾向にあることが確認された。また、理学療法士および作業療法士が配置され、多様な機能訓練を提供しているものの、スタッフの中には集団活動の支援に苦手意識を有する者もみられた。このため、OJTを中心とした技能向上の取り組みを進め、支援の質の平準化を図る必要性が明らかとなった。今後は、専門職との連携を強化しつつ、スタッフの実践力向上と入居者の生活リズム安定化を両立させる体制整備が求められる。
主任 西 隆志

外部評価者
入居者の皆さまが安心して過ごせる環境づくりに向けて、認知症の事例検討とあわせて心理的課題に関する研修が内外で実施され、スタッフの理解が着実に深まっている様子がうかがえました。理学療法士・作業療法士による機能訓練も充実しており、睡眠データを活用した入眠時間の調整や、残存機能を生かした静的・動的ストレッチなど、生活リズムの安定と身体機能の維持向上を目指した取り組みが丁寧に行われていました。その結果、関節可動域や柔軟性の改善がみられ、活動的な暮らしにつながっている点は大きな成果といえます。多くの入居者が機能訓練に意欲的であり、介護度の重度化防止にも寄与することが期待されます。また、写真・動画・絵を用いた回想療法や、小グループでの体操・コグニサイズが日課として定着し、家族から生活歴を丁寧に聞き取ったうえで個性のあるケアが提供されている点は、非常に温かみのある取り組みです。家族を巻き込んだ回想療法は認知機能の維持・改善にもつながる可能性があり、今後の発展が楽しみです。一方で、コミュニケーションが図れる入居者が多い環境ゆえに、経験の浅い介護職員には会話や対応に迷いが生じやすい場面もあるようです。主任によるスーパービジョンの機会をさらに増やすことで、より安心してケアに取り組める体制を目指していました。総合的には、多様な取り組みが実践され、家族との関係性も良好であることが確認できました。地域に根差した事業所として、今後のさらなる発展を期待しております。
〒891-0151 鹿児島市光山2丁目3-5 特定非常利活動法人かごしま福祉開発研究所 (博士)社会福祉学 川崎 竜太

